

## 七海のティータ

天城町立天城小学校 三年 柏井 風香

足の具合が悪くなったおばあちゃんとしょにくらすために、七海が両親とこの島に引っこして来たのは、七海が三年生の夏休みのことでした。

新しい学校になれることができない七海は、虫を探したり、し畜小屋のにわとりを見たりすることが、自然と多くなっていきました。

「七海 新しい学校はどつ。友達はできた。」

お父さんやお母さんや聞かれるたびに、七海は心配をかけてはいけないと思い、

「うん。楽しいよ。みんなとても親切なの。」と、答えていました。

それは、まだ夏の暑さが残る、九月の中ごろのことでした。その日も、七海は一人で帰っていきました。学校と家の半分ぐらいまで来た時のこと、「何だろつ、このあまい香り。」不思議に思った七海は、その香りにさそわれるまま、歩いていきました。すると、その香りは、アスファルトの間から生えた花から出ていたものでした。七海は信じられないというふうに、花に顔を近づけてみました。そして花は深い赤で、人をひきつけるような色をしていました。「こんな色と香りがあるのに、こんな所にあるのはかわいそうだね。」七海は、ていねいにその花をアスファルトか

ら抜くと、家に持ち帰り、庭に植えてあげました。

その日の夜、七海はいつもより早くねむりにつきましました。

「七海 起きて。」

どれくらいねむったところでしょうか。やさしい声と共に、あまい香りが七海を呼びさました。あわてて起きた七海のまぐら元には、手の平に乗りそつな小さな女の子がいました。

「あなた、だね。」

おどろいた七海は、おそるおそる聞きました。

「わたしは、ティータ、今日あなたがたすけてくれた花のせいよ。」自分が見ているものが信じられない七海は、ティータと名乗ったその少女にふれてみました。やわらかな感じよくが手に伝わりました。

「信じてくれた。わたしは、ネリヤカナヤのいう世界に帰ると中にはぐれてしまって、困っていたのよ。それを助けてくれたのが七海、あなただったのよ。お礼と言っては何だけど、あなたの願いかなえてあげるわ。ただし、一つだけよ。」

ティータはそう言つと、指を一本立てて七海の顔の前に出しました。「突ぜん起こされて、願いごとを一つかなえてあげるって言われても、どつしよつ。今、自分がほしいものって何だろつ。」「友達」という言葉が一しゅん七海の頭に思いつかびましたが、「あ、あの、いっしょにくらしているおばあちゃんの足を浴してほしいの。」

ティータは、ちょっとおどろいたように目を大きくするよ、

「いいけど。七海、それって自分のことじゃないわよ。本当にいいの。」

と、七海の目をのぞきこむようにして聞きました。

「ええ、いいわ。自分のことは、どうにかなるわ、きっと。」

七海の言葉を聞くと、ティータは笑って、

「分かったわ。」

と、言いました。そして、立てていた一本の指を曲げた後、両手

で花の形を作り、その中にフツとにじ色の息を吹きかけました。

「これで大丈夫よ、七海。わたし、あなたがこの島に来た時から

ずっとあの場所について、あなたのこと、見てたのよ。あなたの

やさしさがあれば友達のことでも大丈夫よ。自信を持って。」

それだけ言うと、ティータの体はすっつと消えてしまいました。

「七海、早く起きて。大変よ。」

七海のお母さんがごうぶん気味に七海をゆすって起こしました。

「おばあちゃんが、つえを使わないで歩いたのよ。」

七海のお母さんは泣きそつでした。昨日の夜のことを思い出し、

急いでおばあちゃんの所へいくと、おばあちゃんは、つれそつ

にひざを曲げたり伸ばしたりしていました。七海はくつにはきか

え、庭の花を探しましたが、昨日植えたはずの花はありませんで

した。

学校へ行く途中のアスファルトにも、やっぱり花はありません

でした。がっかりした七海の鼻に、あのあまい香りがしました。

「ティータ。」七海は辺りを見回しました。「あなたのやさしさ

があれば大丈夫よ。」ティータの言った言葉が、七海の中でくりかえし聞こえてきました。七海は深呼吸をしてから顔を上げ、いつもより少し軽い足取りで学校へ向かい歩き出しました。

辺りにはまだ、あのあまい香りが残っています。

「七海、がんばってね。わたしはいつでもあなたを見てるわよ。

これからもずっと。」